



エビデンス

夏休みが終わったと思ったら、2学期制の千葉市では各中学、そして市立の高校はもう期末テストです。アリとキリギリスの話ではありませんが、「もっと早めに少しずつ準備しておけば良かった。」とため息をつくキリギリス派が圧倒的に多いように思います。実は人間には目の前の楽しさに引きずられたり、目先の利益が大きく見えてしまったりする性質があるようです。このことを利用して子どもに「目の前にニンジン」作戦を実行したらどうなるかの実験が教育経済学の本に紹介されています。結果はどうかというと、明らかに効果が認められるということです。では、「テストで良い点を取るというアウトプットにごほうびをあげます」と「本を読んだり宿題をしたりというインプットにごほうびをあげます」という2種類の実験のうち、子どもたちの学力を上げる効果があったのはどちらだと思いますか。ごほうびがあれば子どもたちは本を読んだり、宿題をしたりするようになるのでしょうか、必ずしも成績が良くなるとは限りません。テストで良い点を取るという目標がはっきりしている方に効果がありそうです。しかし予想に反してインプットにごほうびの方にしか効果はなかったのです。この理由として、インプットにごほうびが与えられた場合は何をすべきかが明確なのに対して、アウトプットへのごほうびでは、どう行動すれば良いのか具体的な方法が示されていないせいだと考えられています。

この本では実験や統計分析などによる科学的根拠（エビデンス）に基づいた方法が教育にももっと必要だと述べられています。確かにそうかもしれません。今まで教育の現場ではそういう視点が欠けていたように思えます。しかし私はそれと同時に子どもたち一人ひとりが、それぞれ行動する根拠にも目を向けていたいと思います。例えば「宿題をやってこない」という同じ行動でも「本当に忘れていたか」「最初からやる気がなくてやらなかったか」「やりかけたけど投げ出したか」によって対策は異なります。やっただけのことはかえってくるという実感が持てるような方法は必ずあるはずで